

Risk Sciences Group 社のリスク管理情報システム

■ はじめに

リスク管理情報システム (RMIS) 製品とサービスの提供で成功している米国 Risk Sciences Group (以下 RSG) 社は、Fortune 1000 企業におけるビジネス・リスクの理解と管理を支援しています。同社の旗艦製品である Sigma Encore Suite は、保険金請求の閲覧と処理、保険の管理と規制準拠の確認、レポートング、資産や契約証書の管理などを行なうための広範な機能を提供しています。そのコンサルティング・サービスとともに、RSG 社は高い顧客維持率を誇っています。

しかしながら、競争が激しいこの市場では、提供する製品とサービスは進化し続けなければなりません。RSG 社の顧客企業でも高レベルなビジネス・インテリジェンス機能が重要視されるようになり、ユーザに提供している情報のあり方について、再評価することになりました。たとえば、数百におよぶ店舗を持った小売業の顧客では、事故クレームが最も多いトップ 10 店舗を迅速にかつ容易に把握できなくてはなりません。顧客は、クレームと処理の傾向を迅速にグラフィックな画面で把握し、即刻マネジメント対応を要する箇所を判断したい、と RSG 社に要求しました。

顧客にとっては、数億円の損失、従業員ならびに市場の信用と信頼、さらには企業の生存に関わり得る課題であるからです。

他社が製品強化を進めている中で、RSG 社は競合から差別化でき、顧客企業がリスク管理戦略強化が必要としている情報を提供できるソリューションを、追求することにしました。

■ 柔軟でユーザによる構成が可能なダッシュボード技術の探究

RSG 社は、ダッシュボード技術がやみくもな問い合わせをなくし、大量の標準レポートを発行する必要性が削減できる、最適な方法だという結論に達しました。

「データをグラフィックで簡潔にプレゼンテーションすることが鍵だ」と、RSG 社のマネージング・ディレクターである Ken Ancona 氏は語りました。「ダッシュボード技術は情報をユーザに押し出し、意思決定者がどこに注力すべきかを判断できるようにするものである」

しかしながら、Sigma Encore スイート製品の技量の大きさから、RSG 社はその柔軟性をオールインワン・サイズ対応の標準的なダッシュボード・インタフェースに制限したくないと考えていました。従ってソリューションは、個々の企業がそれぞれのユーザにとって意味のあるデータを表示できるダッシュボード画面を、カスタマイズして構成できることが不可欠でした。



そこで RSG 社は、「コントロール部品」ライブラリをミニチュア画面として提供し、それらから企業が選択してユーザのデスクトップで表示できるようにすることを決めました。たとえば、エグゼクティブにはすべてのリスク管理活動を監視できる高レベルのコントロールを表示します。一方で、クレーム処理担当者は、担当する日常活動の合理化のみに関連したコントロールを表示します。そして、コントロールそれぞれのより詳細なデータをアクセスできるドリルダウン画面を構成可能にし、個々のユーザがサマリ・データを形成する要素を理解できるようにします。

以上をうまく実行できれば、ソリューションは複数の目的を果たします。クレームとそのサマリ・データを即刻に表示して提供でき、また従来のテキスト・ベース主体の画面に比べてグラフィックなビジネス評価指標の提供によって、Sigma Encore 製品の視覚的なアピール度を大幅に改善できます。

■ 最適な技術を提供した SL 社

プロジェクトの範囲を理解した上で、RSG 社はコントロール部品ダッシュボードを迅速にかつ最小のリスクで安価に開発して運用することを可能にするテクノロジー・パートナーを探すことにしました。そのソリューションは、Sigma Encore 製品のユニークなアーキテクチャをサポートし、かつその将来あり得るいかなる変更にも対応できなくてはなりません。

RSG 社は、いくつかのソリューションを評価した後、プロトタイプ・ダッシュボードを作成しましたが、克服できない複数の問題に直面しました。

「Sigma Encore 製品は、その機能を標準的な Web ブラウザで提供するにあたって、現在 Citrix 技術を使用している」と、RSG 社のリージョナル・オペレーション・マネージャの John Thurman は語りました。「Citrix ではあり得ることだが、作成したダッシュボードを運用してみたところ、画面の品質が著しく落ちてしまった」

RSG社は、将来的にはCitrixを新しいWebベースのアーキテクチャに変更する予定であるものの、試作したダッシュボード・ソリューションは、Sigmaユーザには受け入れられないだろう、と確信しました。そのとき、RSG社はSL社について知ることとなり、まったく新しいソリューションを経験することになったのです。

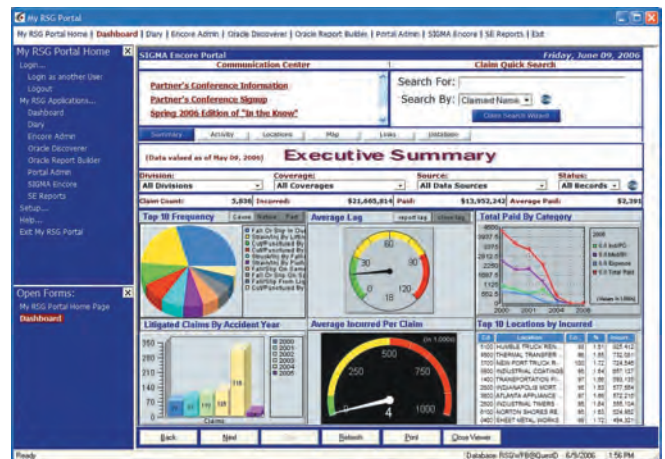
40社以上のOEMをサポートし続けるSL社は、ユーザー・インタフェース拡張におけるさまざまなチャレンジの克服で、20年以上にわたって、世界の企業を支援してきました。

「SL社との経験は、最初から素晴らしいものがあった」と、Thurman氏は続けました。「SL社には、他のダッシュボード・テクノロジーにはなかった、我々と一緒に問題を解決しようという情熱的な意欲があった」

評価作業は、RSG社とSL社のパートナーシップによって進められました。まず、両者はプロジェクト作業工数を見積もり、技術的な課題を検討しました。SL社は、同社のオープンな情報提供プラットフォームであるEnterprise RTView旗艦製品によるグラフィック・ソリューションをRSG社に対して紹介し、運用Oracleデータベースのコピーに実際に接続して稼動するシンクライアントなダッシュボードをわずか3日間で作成しました。この成果より、RSG社はさらに具体的で詳細な評価を進めることを決めました。

プロトタイプ作成においては、両者のコラボレーションによって、RSG社の技術とSL社のJavaならびにJSP技術が統合され、エンドユーザにとってシームレスで透過的なソリューションとなりました。

問題解決におけるSL社の協力的な体制はもとより、Enterprise RTViewのオープンなアーキテクチャが、本プロジェクトにおけるチャレンジの容易な克服を可能にしました。Enterprise RTViewは、各業界をリードする世界のミッション・クリティカルなアプリケーションで、長年にわたって駆使されてきたSL社のグラフィカル・モデリング・システムをベースに構築されています。ビルトインされたダッシュボード・ビルダーは、カスタム・コード、カスタム関数、カスタム・グラフィック・オブジェクト、そしてネイティブ・アプリケーションの機能を持ったダッシュボード画面を開発できるという、比類なき機能を提供しています。これによって、構成可能なコントロール部品ライブラリをユーザに提供したいというRSG社のビジョンが、実現可能となりました。



さらに、本プロジェクトを成功させるためには、その他の技術的かつ感性的な要求条件を満たす必要がありました。SL社の広範で豊富なグラフィック・オブジェクトによって、RSG社はユーザにとって意味があり、かつ魅力的なコントロール部品を開発することができ、また最適でスケーラブルな性能も確保しました。さらに、将来のSigma Suiteの新しい技術をも、SL社がサポートできることの確信も必要でした。

そして、RSG社のプロトタイプ作成におけるSL社の協力は、Sigma Encore製品の新しいグラフィカル・フロントエンドを発表するに至る、長期パートナーシップのベースとなりました。プロトタイプを見たRSG社の顧客はその拡張機能に感銘し、一刻も早くに実装してほしいと要求しました。RSG社とSL社は引き続き協調し、2006年4月にその拡張ソリューションのベータ版がリリースされました。そして、その新しいコントロール機能はRSG社によって大きな展示会で披露され、ユーザからの圧倒的な支持を受け、その評判が広がりました。Thurman氏は、SL社の役割が単なる技術提供のみならず、プロジェクトを成功させることへのコミットメントであったと認識しています。

「SL社とRSG社は共に成功している会社だ」と、Thurman氏は語りました。「我々は、この関係が長期にわたるものだ、と確信していた」

Collaboration
+ The Right Technology
SUCCESS



株式会社 SL ジャパン

〒107-0062 東京都港区南青山3-8-5 アーバンプレム南青山 3階
Tel. 03-3423-6051 info@sl-j.co.jp www.sl-j.co.jp

◆本資料の一部、または全部の無断転写を禁じます。

◆記載されている商品名は、それぞれ各社の商標または登録商標です。